防災世界子ども会議 2005 のご報告

防災世界子ども会議 2005 in ひょうご　国際会議
実行委員長　岡本　和子

「防災世界子ども会議 2005」プロジェクトのご報告を、謹んで皆様にお届けします。

－10 年を経過した阪神・淡路大震災の教訓を世界の子どもたちに伝えよう、未来に生かそうーという思いが、iEARN「防災世界子ども会議 2005」プロジェクトの発想の起点となりました。それが、この大震災に遭い、生き残った者の責務だと信じたからです。

2004 年 9 月、このプロジェクトは、被災地・兵庫でスタートしました。インターネットを活用し、国際交流を通して、世界の子どもたちと、防災について学びあい、語り合い、そして、生命の尊さを考える「会議」を目指しました。まずは国内外の 54 の学校、1,000 人にも及ぶ子どもたちを中心に交流が始まったのです。

交流は、「防災」をテーマに大きく広がりました。そして、その間にも、世界各地では大災害が相次ぎ、多くの犠牲者が・・・。私たちは、ますます「会議」の重要性を確認しました。
2005 年 1 月、国連防災世界会議が兵庫・神戸で開かれました。私たちのプロジェクトの中間報告「復興への思いが世界を包む」(2005 年 1 月 18 日、淡路島）も、パブリックフォーラムとして参加することができました。兵庫教育情報ネットワークを活用し、様々な国の子どもたちの防災への思いを、世界に配信しました。
そして、ついに 3 月 25 日から 28 日まで、神戸、淡路島で、プロジェクトの最終章、「防災世界子ども会議 2005in ひょうご」を開催するに至りました。

世界 12 ヵ国から、子どもや教師 60 人が、全体では 450 人が集い、災害、防災について情報交換し、学び、多くの教訓を得ました。悲しみや絶望を、希望、生きる力に変える知恵を話し合いました。
里山でのユニセフ・パーク・プロジェクト、JICA 兵庫国際センターでのフォーラム、兵庫県立夢舞台国際会議場での発表会まで、国、言葉、文化の違いを超えて交流を図りました。スマトラ沖地震についてのインドネシア・アチェの子どもの報告など、参加国の子どもの発表は、防災についての教訓を示唆し、内外の注目を集めました。
そのまとめとして、3 月 28 日、「今日を防災について考える出発点として、学び、感じ、共有しよう」という宣言文が拍手で採択されました。

私たちは、「防災世界子ども会議 2005in ひょうご」を、文字通り出発点として、2006 年も、生まれたばかりの防災教育ネットワークを充実・拡大させて、世界に情報を発信し、災害救援にも役立てるようになりたいと思っています。

最後になりましたが、プロジェクトにご協力、また、運営に関わっていただいた自治体、団体、企業、そして市民ボランティアの方々に、心から感謝申し上げます。

防災世界子ども会議 2005 in ひょうご

祝辞

兵庫県副知事　齋藤　富雄

皆さん、こんにちは。

一昨年になりますが、この淡路夢舞台国際会議場でアイアーンの国際会議が開催され、世界中からたくさんの子どもが集まりました。そのときの様子が、昨日のことのように思い出されます。

そして今日再び、この国際会議場において、世界の子どもたちを歓迎できますことを、心から嬉しく思います。

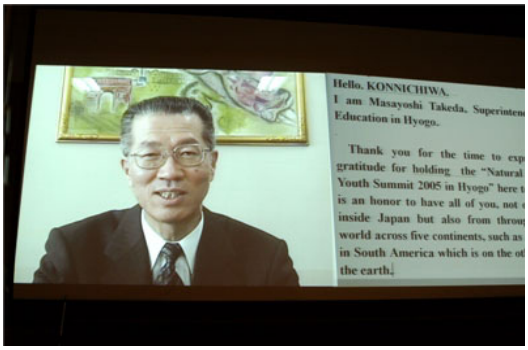
昨年末のスマトラ島沖地震・インド洋大津波をはじめ、世界中で大規模な自然災害が多発し、想像を絶する被害が出ています。今日は、インドネシアからも参加していただいている子どもさんもおられますが、自然災害でまず被害にあうのは、自分を守る力の弱い子どもやお年寄りたちです。そして、「あの時、地震・津波の知識があったらな」と、災害が起こった後いつも反省するのです。

人が一生のうちに大きな災害にあう事はそう多いことではありません。また、時間がたつとともに忘れられていくことも事実です。ひとつの災害の経験を生かせないことが、犠牲を少なく出来ない原因のひとつです。

このたび、国籍・言葉・民族の壁を乗り越えて、子どもたちが自分の命を守るための催しが兵庫県で行われたことは非常に意義深いことと思います。この会議を通じて学んだ事を、みなさんの得意分野であるインターネットを使って世界中に発信していただきたいと思います。

兵庫県も 10 年前の阪神・淡路大震災での経験と教訓を次の災害に生かすために、また、その時に、世界各国から受けた多大な支援に対するお礼として、防災への取り組みを発信していきたいと思います。

最後になりましたが、本日の会議が、ユニセフ、国土交通省などのご協力を得て、すばらしい国際会議となりましたことをお喜びいたしますとともに、会議の準備を進めていただいた実行委員会の皆さんに敬意を表します。



防災世界子ども会議 2005in ひょうご

祝辞

防災世界子ども会議 2005　顧問
兵庫県教育長　武田　政義
（ビデオレター）

みなさん今日は、兵庫県教育長の武田です。

今日ここに、国内はもとより、日本から地球の反対側に位置する南米大陸のアルゼンチンを始め５つの大陸からこのように多くの、みなさんが一堂に会して「防災世界子ども会議」が開催できますことを心からお喜び申し上げます。

今、皆さんが集われているこの会場のある兵庫県では、10 年前の阪神・淡路大震災で多くの尊い命が奪われ、また、住み慣れた街、街並みが一瞬にして破壊されました。
犠牲になられたみなさん方の御霊に哀悼の意を謹んで捧げたいと思います。

しかしながら、我々は悲しむだけでは役目が果たせないことはもとより、これらの尊い犠牲の代償として私たちが得ました貴重な教訓を次の世代に確実に引継ぎ、併せて国内のみならず世界の学校教育に生かしていくことが、被災体験を持ちます私共の使命であると改めて確認をしたところです。

この教訓を活かし兵庫から世界に向けて、世界中の子どもたちが、命の大切さや人間としての在り方、生き方を考え、世界に思いをはせることのできる国際的な視野に立った防災意識を持つ子どもに育ってほしいと願っています。このような思いからｉＥＡＲＮ（アイアーン）の先生方が共に協力してすばらしい取り組みを始めました。

皆さん方も「災害について調べる」、「災害発生のメカニズムを調べる」、「被害を少なくする方法を考える」など、これまでにも多くのことを学んでこられました。さらに皆さん方は、「災害から世界の仲間を助けるにはどうしたらよいのか」をテーマに、建物や道路など町の復興だけでなく、傷ついた人の心が音楽や絵画等の芸術や、自然などにより癒されることなど、大変すばらしい学びの取り組みをされている事に感動しています。

いままでインターネットなど情報通信技術を使って、テレビ会議や電子掲示板で共に考え学んできたことが報告され、世界に向けた防災宣言文が発表されることは、意義のあるすばらしいことです。

最後になりましたけれども、世界中の子どもたちが未来への夢や希望を胸に、新たな時代をたくましく切り拓いていけるよう心から念じますとともに、この会議が実り多いものになりますよう祈念いたしまして、開会にあたりましての挨拶とさせていただきます。
どうもありがとうございました。

「防災世界子ども会議」参加の皆様へ

ユネスコ　パリ　防災セクション部長
バダウィ・ルーバン

「防災世界子ども会議」に参加されて皆様にご挨拶できることを光栄に思っています。皆様方の中には、すでに若くして、地震や洪水や暴風雨、その他の災害を体験している方々がおられると聞いています。そして皆様方全員が非常に災害が起こりやすい地域に住んでいらっしゃると言うことも理解しています。

私自身イランや日本で起こった悲劇について表現されている絵画や写真を見て、胸を打たれました。また被災者の方々に対しての子ども達のメッセージを読み、そして「春一番の丘」での記念植樹の企画などを知り、心を打たれました。あなた達若者がやったことそしてやろうとしていることは大切なことで、ユネスコにとっても価値のあることです。私は心からの感謝をお送りします。

２１世紀に生きる子ども達は、どこにいようと、またどんなに困難であろうと、あなた達は少なくともひとつのことを共有しています。それは私たちが未来に望んでいることを具現化するのはあなた達だということです。事務局長、松浦晃一郎氏の言葉を借りると、あなた達のご先祖（ご両親、ご祖父母、その前のご先祖）が成し遂げられたこと、さらにそれ以上のことを皆様が実行してくださると確信します。また私たちよりもっと素晴らしく成し遂げられることを望みます。

「国連防災世界会議」は、現在も頻発し、常に話題となっている自然災害について、国際社会の関心を今一度、呼びおこす機会となります。地域社会や政府や国際的な組織の努力にも関わらず、自然災害は人的、経済的、環境的な意味において、世界的に甚大な被害をもたらし続けています。

皆様方の大部分は最近の新潟中越地震の惨状をご覧になったでしょう。避難所で生活されておられる方々、またその避難所から登校されている子ども達がたくさんいらっしゃると聞いています。私も新潟中越地震を放映しているテレビを見ましたが、その中でももっとも印象に残ったのが子ども達の笑顔でした。地方自治体がヘリコプターを用意して、空から被災地域の様子を見せる企画をしていましたが、たくさんの子どもたちは涙でいっぱいの顔をしていました。しかし、家族や地域の方々のご努力で故郷に戻れることになり、この災害を克服しようとするけなげな表情で帰郷していました。

最近数ヶ月、そのような大災害が目立ちました。洪水や暴風雨はハイチ、ジャマイカ、その他のカリブ海地方の国々を襲いました。またラテンアメリカ、インド、バングラデッシュでも同様のことが起こりました。強烈な地震はアルジェリア、イランイスラム共和国、モロッコなどを襲いました。イナゴの大襲来や干ばつはアフリカで起こり続けています。ヨーロッパのあちこちで山火事の被害も起きています。さらに問題なのはこれらの自然災害の一番の犠牲者は貧しい人々やハンディキャップを持った人達だということです。

しかし、私はそれでも未来にたいして楽観的です。コミュニケーションの形態が急速に進化した時代において、今日の子どもたちは今まで以上の知識にアクセスできるチャンスがあり、国際交流への可能性もかってないほど高まっています。あなた達若者は今日危機と共に生活しているけれども、学ぶことで、明日の危機を減らせるし、ともすれば場合によってはそれをなくすことができるかもしれないと考えています。

「防災世界子ども会議」参加者の皆様へ

iEARN USA 代表
エドウィン　H.グラガート

南アジア・東南アジアに壊滅的な打撃を与えた地震とそれに続く津波は、皆さんが行っている会議の重要性を証明するものとなりました。

それは、神戸・バムの地震以降、それぞれの地域で家族やコミュニティの復興がなされていることを認識させてくれたばかりではなく、そのような大きな災害の際に役立つ救援の方法と組織作りの必要性をも示してくれました。

今、アイアーンは、アイアーンのネットワークを通じて学ぶ子どもたちがそのような災害時にすぐに連帯できるように、他の組織と協力して救援の方法と組織作りを行っています。不幸なことに、テレビのニュースやそのほかのメディアで流されているショッキングな映像は、このような多くの人命や財産を喪失するような災害が再び起こるであろう事を、私に思い起こさせます。

このような悲惨な状況にあっても、私の心は希望に満ちています。私の希望は、ここ日本で行われているこのイベントでも明らかに示されている、３つのものからなっています。まず第１に、自然災害の原因に対して、世界の人々が注意を払うようになってきたこと。それらの原因の中には、人間によるものも含まれます。世界の子どもたちが、災害の前、災害の間、災害の後に何が起こったのか、興味を持ち始めたということ。そして、その結果、自然災害に対する学習が教育に取り入れられるようになり、その原因と影響を災害が起こった地域に限定するのではなく、世界規模で考えるようになったこと。この自然災害に対する地球規模の視点が、つまり、一国の国民ではなく、人類全体への影響を考えることができることが、地球規模の問題解決と行動を起こす際の最初のステップとなるからです。これらのことが第２の希望の理由へとつながります。

世界の若い人々は、自然災害が起きたときには、単に関心を持つことから、連帯し行動を起こすように変わるでしょう。日本の若い皆さんとイランの仲間は木を植え、災害救援のための義捐金を集めるでしょう。友情の証として、災害にあった若い人々に衣服や絵画を送るでしょう。そして、そのようにしてもらった人々は、次に災害が起きたときには活発に活動する若者へと成長するでしょう。このことが非常に重要です。このことは、大人に対しての力強いメッセージとなります。若い人々が自然災害による苦しみを表現し、そしてそれを軽減する力強い仲間となります。このような、若者の行動は、何もないところからは生まれません。

それが私の希望の３つ目の理由です。テクノロジーが持つ人々をつなぐ力が、災害時に人々の注意を喚起し、行動を促すのです。私たちはこのことを１９８９年からアイアーンの中で見ています。１９８９年アルメニアで大地震が起こったとき、アメリカとロシアの生徒を電子メールでつなぎ救援活動を行ったのです。アメリカとロシアの生徒は、協力して義捐金を募り、赤十字がイェレバンの病院に新しい子ども病棟を作れるようにしました。今日、何百万人という若い人々がインターネット、テレビ会議、無線、そのほかの新しいテクノロジーを使って、おたがいを紹介しあい、地球市民として互いをいつくしむコミュニティを形成しています。これらのことは、このようなテクノロジーなしには不可能であったでしょう。若い人々が、テクノロジーを使いこなさなければ、このことは、これほど早く、力強くは起こらなかったでしょう。私は、皆さんがこれまで行ってきたことに対して拍手を送ります。そして皆さんと、世界の若者を２１世紀のリーダーであると申します。といいますのも、私たちは自然災害をより理解し、災害に対して備えようとここに集まっているからです。

国際協働プロジェクト

「防災世界子ども会議 2005」

Natural Disaster Youth Summit（NDYS）2005

趣　旨

防災世界子ども会議 2005（Natural Disaster Youth Summit 2005　NDYS2005）は、阪神・淡路大震災 10 年を機に、被災地兵庫より誕生した iEARN*（アイアーン）の防災プロジェクトである。阪神・淡路大震災で経験した多くの教訓を活かし、兵庫を核とした世界中の子どもたちが、インターネットなど、ICT（情報通信技術）を活用し、国境も言語も宗教も超えて、協働しながら、命の尊さを考えることによって、「防災」の未来について考える国際協働プロジェクトである。

世界中の子どもたちが、命の大切さや人間としての在り方生き方を考え、「世界」に思いをはせることのできる国際的な視野の防災意識を持った子どもを育成することを最大の目的とする。

2004 年 9 月にプロジェクトをスタートさせ、インターネットをつかって、テレビ会議、フォーラムでの交流とディスカッション、ホームページでの活動報告など、子どもたちが大震災の教訓を収集・共有・分析・発信する。

そのまとめとして、2005 年 3 月、世界１１カ国から子ども達の代表を迎え、日本の子ども達ともに、「防災世界子ども会議 2005 in ひょうご」国際会議をもち、最終日、宣言文を採択し、世界へ発信する。

*iEARN（International Education and Resource Network）は、冷戦時代の 1988 年、「戦争でお互いが傷つけることがないよう、両国の学校間をオンラインで結び、子どもたちと教師が国際協働プロジェクトに取り組むことで、相互理解を深めて欲しいという平和の願いから、ニューヨークとモスクワをつないだプロジェクトを実施したことから始まった。今では、世界約 110 カ国・2 万校・100 万人の子どもたちが参加する世界最大級の教育 NPO に成長している。ICT を活用し、地球規模のネットワークを通して、環境問題、社会問題、人権問題などをテーマにした国際協働プロジェクトが１５８も展開されている。iEARN の日本での窓口が、NPO 法人グローバルプロジェクト推進機構 JEARN（ジェイアーン）である。

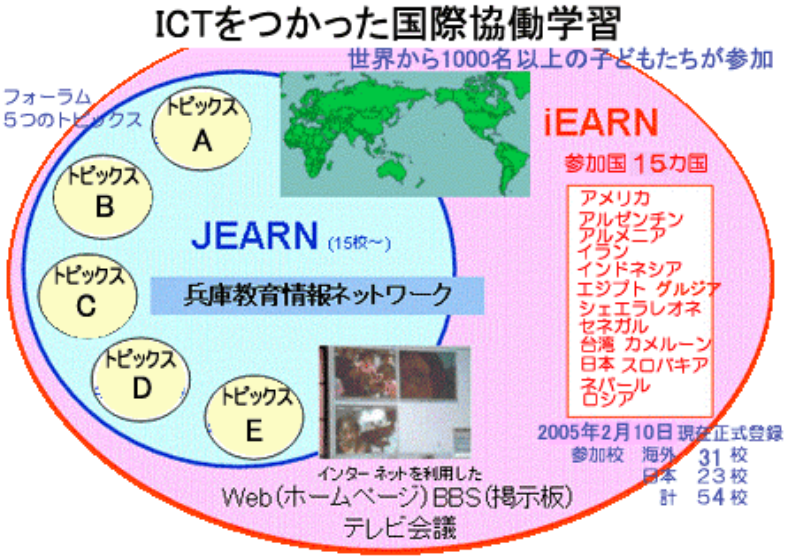
概　要

テ ー マ：　大震災の教訓を未来へ　命の尊さを考えよう！
期　　間：　2004 年 9 月 1 日―2005 年 3 月 28 日

後　　援：　兵庫県教育委員会

参加対象：　小学校・中学校・高等学校
参加校：　世界 15 カ国、国内 23 校、海外 31 校、計 54 校、1,000 名以上の生徒が参加
兵庫からは 600 名以上の生徒が参加

NDYS2005 ネットワーク：



使用言語　　英語（共通語）・各国の母語

国際協働学習のツールとしての ICT（情報通信技術）の活用：

インターネットなどの ICT は、新しい学びの場を生み出す契機を作り出しつつある。本プロジェクトでは、グローバルな新たな防災教育に必要な情報や知恵を、収集、発信、共有することが重要となる。その実現のために、子どもたち、教師の異文化コラボレーションを支えるツールとして、兵庫教育情報ネットワークを活用したテレビ会議、アイアーンのフォーラム、JEARN の ML、BBS、BLOG など ICT を駆使し、実施し、その成果を報告する。

プロジェクトの背景：

1. 防災教育の必要性

- 世界では、自然災害が多発している。大きな被害を受けるのは災害発生地の住民である。しかし、災害前に対策を施す（予防防災）という意識が欠如しているのが現実であり、これは世界的に大きな防災の問題である。この問題を解決する一つの方法は、子どもを対象とした防災教育である。子どもへの教育は、現在及び大人になったときに適切な災害対策を実施できるようになる。
- 兵庫では阪神・淡路大震災以降、命の大切さ・助け合いのすばらしさなど、共生社会における人間としての在り方・生き方を、大震災の教訓に学ぶ「新たな防災教育」として推進してきている。その兵庫から、同じ趣旨で、アイアーン「防災世界子ども会議 2005」プロジェクトとして企画し、ネットワークを活用した国際協働学習として展開するものである。
- 2005 年 1 月、21 世紀の新しい防災指針とすることとし、災害による被害の軽減を目指す目的で「国連防災世界会議」が兵庫で開催された。環境、平和、人権などの地球規模の諸問題は、一国のみで解決できるものではなく、国際社会全体が一致して取り組むべき問題である。人類共通の課題である「持続可能な開発」の実現に向けて、ユネスコを中心に「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」が推進され、2005 年はその最初の年である。本プロジェクトにおける「防災教育」とは、一般に言われる防災教育だけでなく、環境教育、文化教育など多方面に渡っている。

2. 国際教育の必要性

国際化が一層進展している社会では、これまでの異文化を理解するだけにとどまらず、子どもたちが国際社会の一員としてどのように生きていくかを考え、行動に移すことが重要となる。インターネットなどの ICT を、国際教育に積極的に活用していくことが大切である。インターネットが普及して、メールやフォーラムをつかって、世界の教師・生徒と簡単に異文化コミュニケーションができるようになり、さらにブロードバンド化で、テレビ会議を使って世界の教室と異文化コラボレーションができる環境が整ってきている。国際交流を通じた学習を進める国際協働学習は、英語を共通語として、明確な目標と計画をもち、異文化の人々と深い絆で結ばれることを通して、地球市民（国際社会の一員）であるという意識を育成することにある。国際化が進行し、種々の問題が国内だけでは解決できない状況であり、国際的視野を持ち、国際社会を生きる人材が必要とされている。そのためにも、国際協働学習は重要である。

「防災世界子ども会議 2005」プロジェクトの教育的意義

１．国際的視野を持ち、自ら行動できる子どもたちの育成
２．子どもたちの防災意識の向上
３．情報発信能力の向上
４．コミュニケーション能力の向上など

表　参加校一覧

参加国	参加校
アメリカ合衆国	American Museum of Natural History　ニューヨーク
	Stevens Institute of Technology / CIESE Dept　ニュージャージー州
	Federal Way Public Academy　ヘデラレルウェイ
	St. Joseph Catholic School　シアトル
アルゼンチン共和国	IPPI Institute,iEARN-Argentina　ブエノス・アイレス
	Escuela de Educsacion Tecnica 5138 "Alberto Einstein"　ブエノス・アイ
	Secondary School N°　22 Malvinas Argentinas　ブエノス・アイレス
	IPPI Institute　ブエノス・アイレス
	I.P.A.J.Matulaitis　ブエノス・アイレス
アルメニア共和国	Project Harmony Armenia　エレバン
イラン・イスラム共和国	Kherad high school　テヘラン
	Farzanegan high school　テヘラン
	iEARN Iran、 SAF　テヘラン
インドネシア共和国	SMK Palangkaraya, Kalimantan　カリマンタン
	SMU Negeri 4 Denpasar　バリ
	SMU Taruna Nusantara　ジャバ
	Muhammad Nawfal Senior High School　バリ
	SMA Negeri high school バンダ・アチェ
エジプト・アラブ共和国	Hafez Ibrahim School　カイロ
	tarek ibn ziad　School　カイロ
カメルーン共和国	iEARN Cameroon.
	IHS
グルジア	International Education Center "Zari"ラスタビ
シエラレオネ共和国	federation Islamic Secondary School　フリータウン
スロバキア共和国	SOU-hutnicke, Šaca, 040 15 Košice　コツシエ
セネガル共和国	Secondary school Martin Luther King　ダカール
台湾	National Fenghsin Senior High School　高雄
	Min-chyuan Elementary School　高雄
日本（23）	兵庫県立舞子高等学校　環境防災科
	兵庫県立明石西高等学校
	兵庫県明石市立野々池中学校
	兵庫県立川西高等学校宝塚良元校
	名古屋市立柳小学校
	兵庫県神戸大学発達科学部附属住吉中学校
	兵庫県啓明学院中学校・女学院高校
	兵庫県宝塚市立高司中学校
	兵庫県神戸国際大学附属高等学校
	兵庫県神戸市立湊中学校
	兵庫県甲南女子高等学校
	兵庫県神戸市立葺合高等学校
	兵庫県神戸市公文式有野中町教室
	兵庫県神戸市立樫野台小学校
	兵庫県明石市立衣川中学校
	大阪府高槻市立第一中学校
	三重県久居市立立成小学校
	兵庫県神戸市立稗田小学校
	鳥取県立青谷高等学校
	埼玉県立和光国際高等学校
	兵庫県赤穂市 Sherry Kids English School
	東京都墨田区立鐘淵中学校
	滋賀県 ECC ジュニア BS 鴨川平教室
ネパール王国	Bal Bikash SecondarySchool　カトマンズ
ロシア連邦	National No.1129 School　モスクワ

教材：　阪神・淡路大震災記念　人と防災未来センター発行
「阪神・淡路大震災　教訓集」
兵庫県教育委員会発行　防災教育副読本
「明日に生きる」

防災世界子ども会議（NDYS）2005　URL　http://ndys.jearn.jp/

活動：　参加校の生徒はチームを組み、5 つのトピックスの中から自分たちの興味関心にあったものを選び、参加する。今年度は阪神・淡路大震災の 10 周年にあたり、主に地震についてのトピックスが取り上げられた。その５つのトピックスは以下である。

1. What are natural disasters?　災害って何？：過去に発生した地震について調べる（地震の多発地域、地震による二次災害、余震、地震火災、津波、地震の揺れと被害の大きさ）

2. Why do they happen?　災害ってどうして起こるの？：災害発生のメカニズムを調べる（地球の仕組み、地震の種類、活断層、地震の予知）

3. What can I do?　災害が起こってどうなった？：被災地の被害状況を調べる（人的被害、建築的被害、ライフラインの被害、避難所、仮設住宅、非難時の非常食、被災地での情報ネットワーク）

4. What shall we do tomorrow?　災害から身を守るためにはどうしたらいいの？：被害を少なくする防災力について考える（災害への準備と心構え、防災マップの作成、住まいの安全性、応急処置、防災訓練、ボランティア、住みよい街づくり）

5. How can I help you?　災害から世界の仲間を助けるにはどうしたらいいの？：命の大切さ、人間としてのあり方、生き方を考え、私たちにできることを考える。（音楽、絵画、住みよい社会作り、支援の輪）

スケジュール：

～2004 年 9 月　プロジェクト参加校登録

9 月～10 月　9 月 1 日より、プロジェクトをスタートする。
同じトピックスを選んだ他校参加者とトピックス毎に分けられたフォーラム（BBS）、テレビ会議で交流しながら学習を進める。

11 月～12 月　各学校の成果物を完成させ、ウェブ上で公開する。
テレビ会議で交流しながら学習をすすめる。

2005 年 1 月　淡路島国営明石海峡公園「春一番の丘」で河津さくら記念植樹
プロジェクトの中間発表として、阪神・淡路大震災 10 周年記念事業、国連防災世界会議 パブリックフォーラム「復興への思いが世界を包む 絵画展・写真展とテレビ会議」を兵庫県立淡路夢舞台国際会議場で開催する。
会議の様子は、テレビ会議で参加校をつなぎ、インターネットを通じて兵庫より、世界中にライブ配信する。

1 月～3 月　プロジェクトのまとめとしての 3 月開催の国際会議に向け、発表の練習をする。同時に、他校の成果物に対しての感想をフォーラムで述べあう。

3 月 25 日～28 日　阪神・淡路大震災 10 周年記念事業
「防災世界子ども会議 2005 in ひょうご」国際会議
国際会議に各学校から参加し、プレゼンテーション、ポスターセッションなどで報告する。最終日、「防災世界子ども会議 2005-ひょうご宣言-」を採択し、世界に向けて発信する。

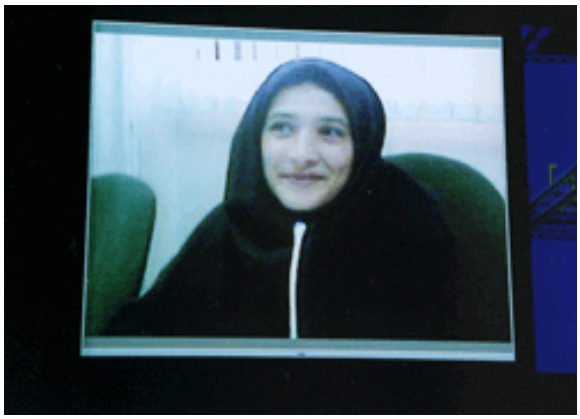
6 月 28 日　プロジェクトの最終報告書の発行

2004 年 9 月 1 日
9 月 1 日は防災の日
この日「防災世界子ども会議プロジェクト」がスタート！
兵庫県明石市立野々池中学校の生徒会のみなさんが、アイアーンエジプト・ユースサミット会場と兵庫県教育研修所を結んだテレビ会議を行った。

国際協働学習のツール　テレビ会議

2004 年 10 月 22 日
台湾、イランとのテレビ会議

2004 年 12 月 3 日
6 カ国、11 ポイントを結ぶテレビ会議



2005 年 1 月 18 日
「復興への思いが世界を包む
絵画展・写真展とテレビ会議」

「防災世界子ども会議 2005 in ひょうご」国際会議の中間発表

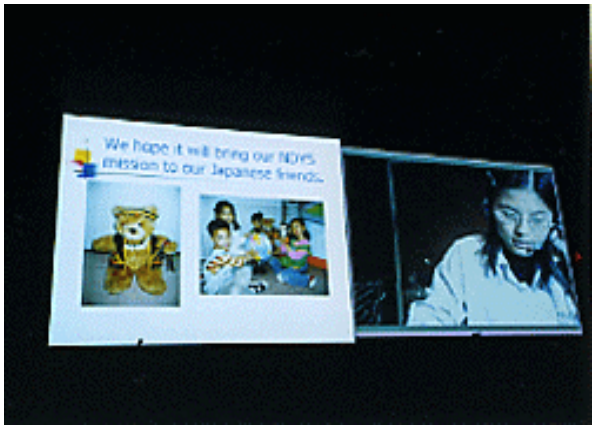
イラン大震災支援プログラム「書き損じはがきプログラム」報告
兵庫県香呂南小学校

書き損じはがきを集めて 2003 年 12 月に発生したバムの義捐金に変えた活動を報告した。暗記した英語で、撮影カメラに手を振ると、バムの子ども達から、笑顔のメッセージが返ってきた。

「防災世界子ども会議 2005」プロジェクトの中間発表

兵庫県立舞子高等学校の発表

兵庫県神戸市立葺合高等学校の発表



台湾　フェンシン高等学校の発表

兵庫県啓明学院中学校・女学院高校の発表

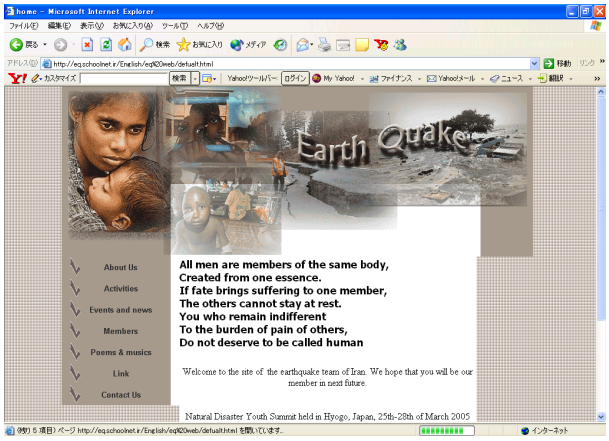
2005 年 1 月 18 日
「復興への思いが世界を包む
絵画展・写真展とテレビ会議」

会議の様子は、テレビ会議で、イランや台湾、アルメニアをつなぎ、インターネットを通じて兵庫より、世界中にライブ配信した。テレビ会議から飛び出した台湾、イラン、アルメニアの子どもたちの顔、声と日本の会場とが一体となりインターネットの威力と効果を実証することができた。

総評：　京都大学大学院　地球環境学堂　助教授
ラジブ・ショウ氏

NDYS2005 参加校の WEB -1-

参加校が、それぞれの WEB ページで情報発信しながら、情報を共有し、メールによる突っ込んだ議論をもち、互いに分かち合うことの大切さを学んでいる。



“Welcome to the site of the earthquake team of Iran!”

Kherad high school

Farzanegan high school

http://eq.schoolnet.ir/

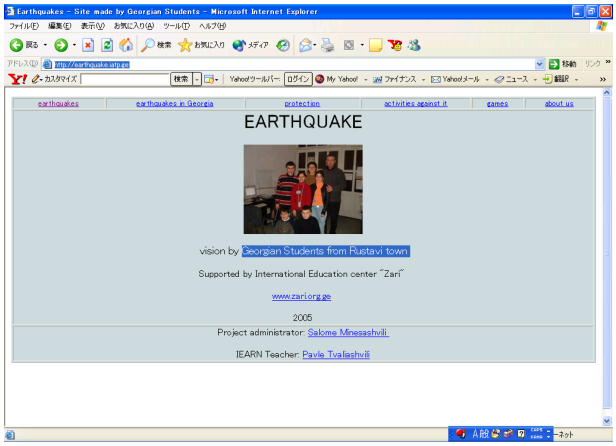
「防災ポストベアの冒険」

名古屋市立柳小学校

http://www.yanagi-e.nagoya-c.ed.jp/

「防災学習を通した国際交流」の紹介

http://www.yanagi-e.nagoya-c.ed.jp/ndys2005/postbear.pdf



“EARTHQUAKE”

Georgian Students from Rustavi town

http://earthquake.iatp.ge/

NDYS2005 参加校の WEB -2-

“Sakura Bear in Taiwan”

National Fenghsin
Senior High School

http://www.fcsh.khc.edu.tw/

“Talk About the Earthquake Through our Paintings”

Project Harmony Armenia

http://www.projectharmony.am/

Natural Disaster Youth Summit ** Sakura Bear Story **

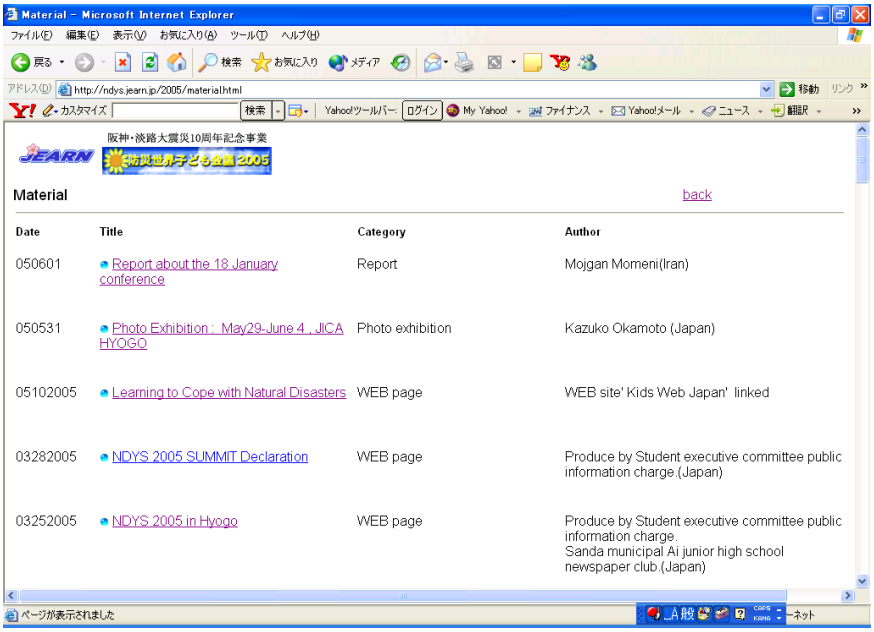
兵庫県立川西高等学校宝塚良元校

http://blog.livedoor.jp/epiker78/

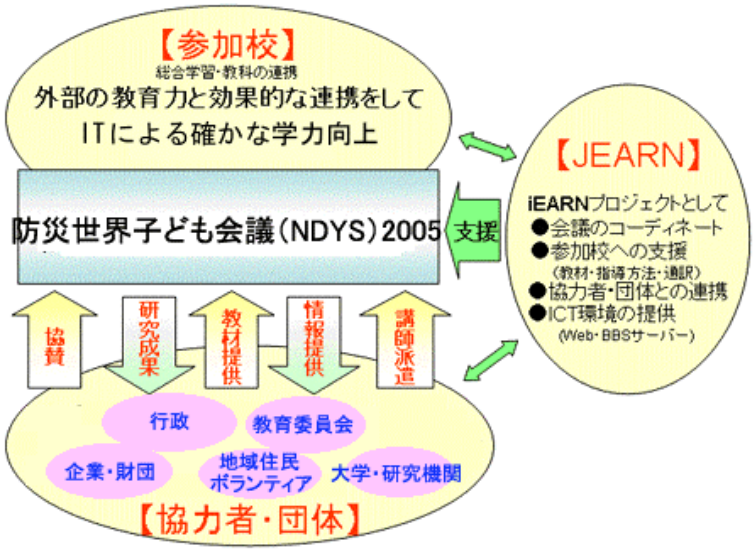
国際協働学習のツール　マテリアル

参加校の教師が、それぞれに提供した素材を、共有しているページである。フォーラム、メール、テレビ会議と交流を重ねることで、アイアーン NDYS コミュニティが誕生した。

マテリアル URL:　http://ndys.jearn.jp/2005/material.html



組織の関係図：



生徒、教師の声

3 月 25 日～28 日の全体会議中に、参加している生徒及び教師に対して、NDYS2005 についてアンケート調査を行った。以下は、生徒、教師からの意見の一部である。

生徒へのアンケート

●NDYS で興味深かったこと

- 自然災害の知識を共有できたこと
- プレゼンテーションをつくる、見る
- グループでの作業
- たくさんの友達ができた
- 他の国の習慣や伝統を知ることができた
- 地震が懸念される地域なので、地震の情報を得ることに興味をもった

●学校での行動の変化

- クラスメートに地震について教えている
- 他の生徒が NDYS を知るようになって、国際的なニュースに気を配るようになった
- 以前より興味を持つようになったので、学校で広めようと思う
- 世界で被害にあった人を助けるために、友達に話をしようと思う。
- いろいろな知識を得て、それをすべての生徒で共有した
- 自然災害について友達に話そうと思う
- NDYS について友達に話した

●家族に対する行動の変化

- お互いを大事にする
- 家族にたくさんのことを伝えられるようになった
- 近所の人と連携できるように、家族に話をしようと思う
- 自然災害のこと、災害中にするべきことを話そうと思う
- 自然災害について話したいと思うようになった

●コミュニティに対する行動の変化

- 社交的になった
- リーダーになりたい
- コミュニティに対して災害対策を教えようと思う
- コミュニティの意識を高め、対策をしてもらうようにする
- 自然災害について教えることができる
- 変化はない

●次回の NDYS でしたいこと

- 世界の飢餓について学びたい
- 自然災害に対する活動をもっと学びたい
- 地震についてさらに学びたい
- ディスカッション
- 自分の国では発生しない自然災害について学びたい

教師へのアンケート

●生徒が興味を持っていた内容

- プレゼンテーション
- ディスカッション
- たくさんの国の習慣や伝統
- 災害の研究

●次回の NDYS に必要な内容

- 内容は今のままでよい
- すべてのレポートをまとめるオンラインフォーラム
- 安全な村、安全な都市、安全な大都市をつくることを考える
- 時間、日数

●生徒の行動の変化

- 新しい世界観を持つようになった
- 自然災害を意識するようになった
- 他人に対してオープンになった
- 異なる国の人と異なる言語でコミュニケーションできるようになった
- 地震リスクマネジメントに関わることをするという新しい考えを持つようになった
- ディスカッションすることにより、多くの情報と経験を得て、考え方が大きく変わった
- 環境問題に意識を持つようになり、より良い世界を作るべきだという考えを持つようになった。

阪神・淡路大震災１０周年記念植樹

2005 年 1 月 18 日（火）12 時 30 分～　淡路島国営明石海峡公園にて
「春一番の丘」で河津さくら 21 本を記念植樹した。

震災を忘れないようにするためのシンボルになって欲しい
さくら記念植樹　URL：　http://ndys.jearn.jp/050118/syokuzyu.html